

# 日本は遠くにありて想うもの？ ～インドからの日本留学事情～

シンガポール事務所

インドの人々に日本の印象を尋ねると、最初に返ってくる答えは「とても遠い国」です。飛行距離や時間だけでなく費用の面でもハードルが高いため、現地旅行会社の日本向け商品の担当者であっても、一度も日本を訪れたことがないというほどです。

そんなインドで、若者たちが日本語を学んでいる学校を訪れる機会がありましたので、その様子を紹介します。

## 1 日本語学習の状況

多言語で知られるインドでは、公用語であるヒンディー語、準公用語である英語の他、州公用語とも呼ばれる各地の言語（ローカル言語）があります。学校の授業は政府が推奨してきた3言語政策によって、ヒンディー語、英語、ローカル言語で行われています。私立校などローカル言語の代わりに外国語教育を導入している場合でも、歴史的、地理的に近いヨーロッパの言語であるフランス語やドイツ語への人気が高いようです。日本語教育は、その多くが語学学校等の学校教育以外で行われているのが現状です。（参考：国際交流基金日本語教育調査研究・情報提供）

## 2 なぜ日本語を学ぶのか



熱心に授業を受ける学生たち

インドの日本語学習者は、学費を負担してまでなぜ日本語を学ぶのでしょうか。訪れたプネ大学の日本語学科で学習動機として一番に挙げられたのは「日系企業への就職」でした。プネ市にはプリジストン、本田技研工業等の自動車部品製造業をはじめ多くの日系企業が進出しており、日本語学習者がインド

で最も多い都市としても知られています。インド経済の発展を追い風に日系企業のインド進出が進み、専門技術だけでなく日本語能力が求められているということです。プネ市で日本語を学ぶ学生は地元の日系企業で働くことを希望していますが、プネ市内だけでは就職の機会が限られてしまうため、より多くの日系企業が進出している大都市での就職も考えなければならないそうです。中でも女性はインド国内の大都市よりも日本で働くことを希望する学生が多いと聞き驚きました。

## 3 生活コストが最大の壁？

日本での留学生受け入れ数は、アメリカの約2割（世界全体のシェアは4%）の13万

5千人にとどまっています。その中でもインドから日本への留学生は0.4%と極めて少なく、日本への関心の高まりが日本留学に結びつかないことを残念に感じました。(参考：平成24年5月1日現在 独立行政法人日本学生支援機構調べ)

インド人の留学先としての一番人気はやはりアメリカの大学です。英語で講義を受けられることは勿論、留学生への奨学金制度が充実していること、就職と昇進に有利であることが人気の理由です。

一方日本の大学に留学する場合は学費と生活費を工面することが難しく、特に生活コストの高さが問題になっているようです。留学生の多くは借金で資金を調達するケースが多く、その額を少なく抑えられることが留学の条件になっているそうです。

#### 4 日本を伝えたい



1年生を教えているベテラン教師

プネ大学日本語学科には毎年200名以上が入学しますが、ひらがな、カタカナ、漢字と学習内容が高度になるにつれて人数が減っていくのだそうです。多言語社会のインドでは「言語は手段」という意識が強く、日本語を学ぶこともただ就職のため、という学生が多いのでしょう。それでも日本語学習を通じて日本や日本文化を知ること、日本への理解が深まり、日本語の勉強を継続する意欲に繋がっていく学生も

います。大学では最近の取組みとして、ベテラン教師を低学年の担当にするという、これまでの逆の試みを始めたそうです。日本を熟知した教師の日本への関心を引き出す授業によって、学習意欲を高めていこうというものです。更には、学生たちに日本を体験させるため、日本の大学と連携して短期の交流プログラムを企画しています。15万円程の参加費を学生たちが負担しなければならないという課題はありますが、何より「百聞は一見に如かず」で実際に日本を見ることによって日本語学習への意欲を向上させ、日本留学のもう一つの高い壁である言葉の問題を解決することに繋がっていくのではないのでしょうか。

#### 5 日本を身近に感じる場所

学生だけでなく、インドの人々にとって日本が遠い国であることは確かです。以前参加したインドの旅行博では「富士山」「桜」「温泉」という日本観光のキーワードも通用しない場面がありました。それでもプネ市には、日本人でさえ自分がまるで日本にいるかのような錯覚を覚える空間があります。プネ市と岡山県が協力して造り上げ



プネ岡山友好公園

た日本庭園「ブネ岡山友好公園」です。読書やウォーキング、語らいの場所としてブネ市民に親しまれているだけでなく、インド唯一の日本庭園式公園として国内外に広く知られています。

学生たちもこの公園で日本という遠い国に思いをはせているのでしょうか。

日本に関心を寄せてくれている学生たちが、日本への留学や就職の機会を得て、日本で経験を通して日本とインドの交流に関わる人材となる日がくることを期待したいと思います。

(鈴木所長補佐 東京都江東区派遣)

